

## 江戸建仁寺流系本の展開

正 会 員	河	田	克	博*
正 会 員	麓		和	善**
正 会 員	渡	辺	勝	彦***
正 会 員	内	藤		昌****

## 序

江戸建仁寺流系本「基幹本」の原本は17世紀中葉に成立し、それが『建仁寺派家伝書』として18世紀初頭に再編・体系化になったことは、前稿の通りである<sup>1)</sup>。その成立以後『建仁寺派家伝書』は、家伝書として編纂されなかった史料とともに、多様な形で伝来されていく。それはまず、「基幹本」の内容・構成に立脚しながらも新たな視座で作成される「展開本」、さらに「基幹本」の内容・構成の本質が失われ、また他家の史料を混交収録する等のいわゆる「雑録本」として伝播していくことになる。

そこで最初に、「展開本」とみなされる次の5史料の内容を紹介し、その特質を考察する。

## 1-1 「展開本」の書誌

(1) 『社向書木割』<sup>2)</sup>(東京都立中央図書館所蔵)

当史料は、茶色布表紙の卷子本1巻(17.8cm×1287.0cm)で、図は描かれず、すべて説文で記述される。内容は次の順序である。

①見世棚作保古良、②鳥居・華表・衡門、③一間社、④二間社、⑤小三間社、⑥大三間社、⑦五間社、⑧王子作之社、⑨神明作、⑩三層塔、⑪五層塔、⑫三間仏殿、⑬須弥壇、⑭法堂、⑮僧堂、⑯庫裏、⑰三間山門、⑱多宝塔、⑲大塔、⑳小塔、㉑広間、㉒棟門、㉓四足門、㉔唐門、㉕唐棟門、㉖向唐門、㉗向平<sup>(懸)</sup>地門、㉘楼門、㉙八足門、㉚唐四足門、㉛大門。〔( )内筆者注、以下同。〕

奥書には「甲良小左衛門源宗利書／于時十八才」とある。甲良家における幼名や法号などを考え合わせ第5代棟利が、少なくとも「宗」を「棟」に改める享保2年(1717)以前<sup>3)</sup>、おそらくは作事方に初出仕した宝永(1704～1710)頃<sup>4)</sup>、筆録したものと推定される。

また記載内容については、上記項目のうち㉑広間を除

いて、すべて『建仁寺派家伝書』中に見られる項目で、記述表現や木割内容も類似するものであるが、その異なる点も少なくない。その詳細については後述するが、何れにしても記載項目からすれば『社向書』なる題名は適当とはいえず、棟利が18才の時、神社建築を学ぶために記し始めたものが、途中より目的を変えて、諸建築にまで及んだものと察せられ、題簽に細書付加された「木割」なる文字が、その経過を意味していよう。

## (2) 『諸堂』(東京都立中央図書館所蔵)

薄茶布表紙の卷子本1巻(37.2cm×687.5cm)の史料で、図主体である。奥書は有しないものの、巻末に「建仁寺流官匠甲良印」なる朱角印がある。また、下記④の向拝柱下横に「甲良棟利」の名が記され、筆跡はやや粗いものの『堂社門』[後掲(4)]との近似がみとめられ、5代棟利が「宗」を「棟」に改める享保2年より、病没する享保20年(1735)までに記したものと考えられる。

記載内容は次の通りである。

①内輪蔵、②三間仏殿、③一間仏殿、④三間四面本堂造、⑤僧堂、⑥講堂、⑦庫裏、⑧風呂、⑨雪隠、⑩庫裏、⑪東金堂、⑫西金堂、⑬護摩堂・御影堂・論儀座・灌頂院、⑭鐘楼・鼓楼、⑮食堂。

題名通り、すべて堂雛形に属するもので、項目名としては、①②⑤⑦～⑩が『建仁寺派家伝書』―「禅家」に、④が同じく「諸堂」に、⑥⑪～⑬⑮が「伽藍」にある。しかしながら、③はここに初見の木割で、⑭は項目名としては「禅家」に見られるものの、当史料は和様で描かれる点において異なる。またこれらを、『(甲良宗賀伝来目録)』<sup>1)</sup>中の各図と照合すると、⑥⑪～⑬⑮は「聖家伽藍図」とほぼ同様であるが、禅家に関するものは、①こそ「禅家伽藍図」に描かれるものの、②⑤は若干変容しており、⑤⑦～⑩は柱間数も異なり、図としてもここに初見の木割である。要するに当史料は、『建仁寺派家伝書』にない木割が一部含まれている点において重要である。

## (3) 『塔全』(東京都立中央図書館所蔵)

紺地紋入金絵入布表紙の卷子本1巻(29.1cm×611.5cm)の史料で、巻末に『諸堂』と同じ押印がある。

\* 修成建設専門学校 教授・工修(名工大大学院博士後期課程)

\*\* 文化財建造物保存技術協会・工修

\*\*\* 名古屋工業大学 助教授・工博

\*\*\*\* 名古屋工業大学 教授・工博

(昭和62年12月4日原稿受理)

奥書はないが、筆跡の近似により『諸堂』と同様棟木の筆録と思われる。記載内容は図主体で、次の順序で記される。

①三重塔、②五重塔、③七重塔、④九重塔、⑤十一重塔、⑥十三重塔、⑦竜塔。

これらは何れも、『建仁寺派家伝書』—「層塔」に対応する項目となっている。ところが、木割内容を細かく比較すると、若干の相違がみとめられる。そこで他家の木割書との比較に及ぶと、その相違部分は平内家『匠明』、さらに精察すれば、その祖本を伝存すると考えられる『諸記集』<sup>5)</sup>に見出される。しかしながら、重塔の木割については元々両家の史料に大差はなく、むしろ柱間枝数など共通する内容が多い。そして当史料には、2種以上の木割値を記した選択の自由を与える箇所が多数あり、かつ『建仁寺派家伝書』固有の表現も相当数指摘できる。つまるところ当史料は、棟木が、他家の史料に及んで研鑽を積んだ一史料と察せられる。

#### (4) 『堂社門』(東京都立中央図書館所蔵)

当史料は、紺地茶模様入布表紙の卷子本1巻(31.8 cm × 610.1 cm)で、巻末に『諸堂』や『塔全』と同じ朱角印を有す。また、題簽に「甲良若狭」と記される。甲良家において若狭の受領名をもつ者は、5代棟木、10代棟木、11代棟木の3人であるが、筆跡は『諸堂』や『塔全』と似るは明らかで、5代棟木の筆録と断じてよからう。棟木が若狭を受領する享保8年(1723)以降<sup>6)</sup>、没する同20年までに記されたものと考えられる。内容は次の順序である。

①鳥居、②神明鳥居、③(鳥居)、④拝殿要入、⑤楼門、⑥八脚門、⑦(七間)拝殿・幣殿、⑧見世棚作り保古良、⑨一間社、⑩二間社、⑪小三間社、⑫大三間社、⑬五間社、⑭王子作祠、⑮神明作之宮、⑯神明造一間社。

図主体の記述であるが、⑬のみ説文だけあって図はなく、逆に③は図のみで説文はない。また、項目名でも判るように内容は神社建築に関するものばかりで、題名にある「堂」に該当するものはない。さらに、④⑦以外は、すべて『建仁寺派家伝書』に見られる項目であるが、木割内容は必ずしも一致しておらず、むしろ『社向書』〔前掲(1)〕との関連がうかがえる。それについては後述するが、甲良家技術における神社建築の基本的な木割を、図面上で知ることができる点においても、当史料は貴重である。

#### (5) 『組物』(東京都立中央図書館所蔵)

当史料は、萌黄地紋入布表紙の卷子本1巻(28.8 cm × 1528.8 cm)で、前掲『堂社門』などと同じ朱角印が巻末にある故、元は甲良家の史料中に伝存したものである<sup>7)</sup>。奥書により、享保18年(1733)甲良家の門弟森万右衛門定教が、甲良家の秘蔵なるものを、建仁寺流の定法を速やかに知るべく記したことが判る<sup>8)</sup>。内容は次

の如くである。

①<sup>(大斗)</sup>台料備、②三料備、③三料余組備、④出組、⑤二手先組物、⑥三手先組物、⑦四手先組物、⑧唐様出組、⑨唐様二手先、⑩唐様三手先。

以上①～⑦は和様組物、⑧～⑩は唐様組物の部材構成の記述であるが、木割値は一際記されない。それぞれ、組物の立面図と伏図が隅と平に分けて描かれ、使用する斗や肘木の数量を明記する。要するに当史料は、設計に当たって利用される木割書ではなく、実際の工事計画の時必要な、いわゆる積算資料に属するものである。しかしながら、木割書の中で略されがちな組物の正確な構成を知る上で、図示詳述された意義は大きい。

#### 1-2 「展開本」の特質

以上見てきたように、「展開本」に属する諸史料は、「基幹本」の影響を受けながらも単なる収録にとどまらず、何らかの形で新しい展開をうかがわせるものである。そして、このうち4史料は甲良棟木の筆録とみなされる点も留意したい。そこで、特にこの4史料を「基幹本」と比較分析し、棟木が試みた新たな要素について考察する。

棟木が18才で『社向書木割』を記した時には、『建仁寺派家伝書』にある木割内容や項目構成は、ほぼ完成していたと見られる。それは、『社向書木割』の項目名が「広間」を除き、すべて『建仁寺派家伝書』に見られ、項目順序の一致する部分も多く見られること、貞享元年～2年の奥書を有する『(甲良宗賀伝来目録)』において、確実に既定された木割が存在すること、等によって判るであろう。しかしながら一方で、『社向書木割』の内容には、『建仁寺派家伝書』と相違する部分もある。これは、単なる誤写とは思えない、意識的な改変と思われるもので、少なからず指摘できる。その主な点を挙げると次のようである。

① 柱間枝数が大きく相違する項目がある。例えば、「二間社」の記述において、『建仁寺派家伝書』では、中の間(相の間)を8枝、その両脇の間を18枝にしているのに対し、当史料では、中の間を4枝、脇の間を13枝としている。このような箇所は、「大塔」の記述にもある。

② 当史料の⑫～⑰は、説文としては『建仁寺派家伝書』—「禅家」および『(甲良宗賀伝来目録)』—「禅家伽藍木割完」、図面としては同「禅家伽藍図」に対応するものであるが、特に地垂木はそのまま飛檐垂木の勾配を緩くしている。例えば、「三間山門」の記述において、『建仁寺派家伝書』『(甲良宗賀伝来目録)』ともに飛檐垂木の勾配は、下重が2寸8分、上重が3寸であるが、当史料では、下重が2寸6分、上重が2寸8分となっている。他の「三間仏殿」や「法堂」等も同様で、おしなべて3寸から2寸8分に改められている。なお、『(甲良宗賀伝来目録)』自体、「三間仏殿」と「法堂」の記述において、

屋根引渡勾配が説文と図で異なっているが、当『社向書木割』では、図面である「禅家伽藍図」の数値が使われている。

① 用語を変更しようとする意識がうかがえる。その最も明白なのは、部材の比率を示す数値の後に「計」の字を使用していることである。『建仁寺派家伝書』および『(甲良宗賀伝来目録)』では、この場合、「斗」の字が使用され「計」の字は全くない。また他にも、亀腹を「亀腹石」として統一表現されていたものが、当史料では「亀腹石」とともに「磐座」なる新たな表現で示されている等、種々の改変が認められる。

これらにより、『社向書木割』は棟利が若年に記したにもかかわらず、棟利自身の考えが盛り込まれているとみるべきである。特に、㊦の飛檐垂木勾配の微妙な改変には、より実用に即した意識が感ぜられる。

次に、棟利が一人前の棟梁として活躍するようになって記されたと考えられる3史料についても、同様のことが言える。とりわけ、棟利が若狭を名乗るようになって記された『堂社門』は、『社向書木割』の冒頭①～⑨の内容とよく対応した表現となっており、棟利自身の一貫した見解がうかがえる。例えば、先の④で指摘した「二間社」の記述において、柱間枝数は『建仁寺派家伝書』によらず、『社向書木割』のものが図示されているのである。また、『諸堂』に記される「内輪蔵」も、木割内容自体は『(甲良宗賀伝来目録)』—「禅家伽藍図」と同様ながら、収蔵する經典の説明などを付記しており、より実際の史料に近づけている。

以上のように、父祖伝来の技術史料を基幹として、それを発展させるべく努めた形跡が、甲良家5代棟利の著書にうかがえる。そして棟利が他界する直前には、『組物』のように、甲良家直門の弟子によっても、新たな応用がなされたわけである。

## 2-1 「雑録本」の書誌

次に、これまで見てきた「基幹本」および「展開本」の内容を伝存しながらも、特にその構成において、いわゆる雑録と考えられる5史料について、その書誌を検討し、特質を論じていく。

### (1) 『大工割方雑集』(東北大学狩野文庫所蔵)

当史料は、白表紙の卷子本1巻で、法量は(30.1 cm × 1700.7 cm)である。表紙に上記題名が墨書され、巻頭に「雑集 坂上勘兵衛伝来并和泉嘉右衛門其外他伝来」とある<sup>9)</sup>。次いで目録が記され、その順序に従い、次のように図主体と木割が収録される。

①三間妻、②塀重門、③昔広間、④楼門、⑤四つ足門、⑥棟門、⑦楼門、⑧三間山門、⑨老間社、⑩一間社流作、⑪(見世棚作)、⑫神輿、⑬唐門、⑭宮殿、⑮七間之堂、⑯唐用五間之堂、⑰如法堂、⑱鐘撞堂、⑲鐘楼(イ)、⑳鐘楼(ロ)、㉑鐘楼(ハ)、㉒三重塔、㉓鰐口・宝着・風池、

㉔多宝塔、㉕五間社、㉖高欄之割、㉗竹節割、㉘(鯨の割)、㉙護摩檀、㉚須弥檀、㉛三鼻懸魚割。

このように、いわゆる武家雛形から部分意匠に至るまで内容は多岐に及び、収録順序に木割を類別した形跡がうかがえるものの、④と⑦が全く同じ内容である等、まさに雑録の史料である。巻頭の記述にあるように、複数の匠家の木割が混在しており、⑨に「和泉嘉右衛門伝来」、⑫に「甲良又兵衛(花押)ノ児玉次郎吉殿」、⑬に「坂上勘兵衛」と記名がある。そして、特に④～⑧㉑㉒㉓㉔㉕の木割内容は、程度の差こそあれ『(甲良宗賀伝来目録)』および『建仁寺派家伝書』の木割と類似しており、このことがまた、当史料を江戸建仁寺流系本として位置付ける理由となっている<sup>10)</sup>。また㉑には、「辛酉天和元年十月十三日」と記され、当史料作成の上限年代が確認されるよう。

### (2) 『匠家雛形』(東京都立中央図書館所蔵)

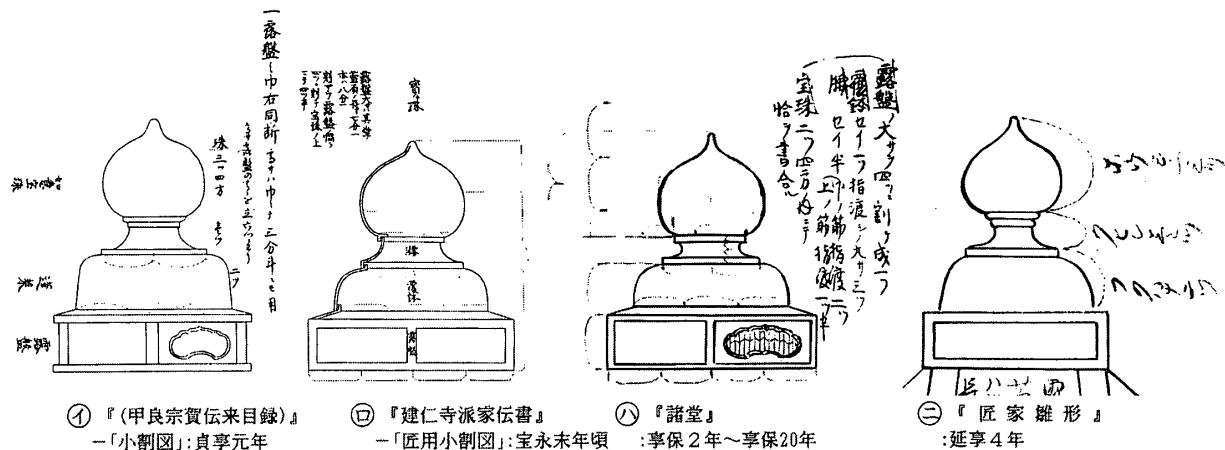
当史料は、淡青色紙表紙の卷子本2巻であるが、題簽には上記題名とともに「上之巻」「中之巻」と記され、元は3巻で、下巻が欠けていることが判る。史料の法量は、上之巻:(27.2 cm × 1536.1 cm)、中之巻:(26.9 cm × 955.6 cm)である。記載内容は図主体で、次の順序で記される。

上之巻:①唐戸之割、②(向拝虹梁・唐様台輪柱貫・和様柱貫)、③(懸魚)、④(海老虹梁・冠木鼻)、⑤鬼板、⑥イノメ懸魚、⑦(葵)懸魚、⑧(増上寺勅額門・伝通院一部分意匠)、⑨(紅葉山一宝珠)、⑩(唐破風懸魚)、⑪(唐破風)、⑫(御所棟)、⑬(数寄屋)、⑭(唐様台輪・履)、⑮(櫛形・垣連子・幣軸)、⑯(三斗余組・三斗)、⑰(唐戸・扉)、⑱(高欄・擬宝珠・逆蓮)、⑲唐様二手先・日本様二手先、⑳唐様三手先、㉑輪蔵之腰組三手先、㉒(竹の節)、㉓宝珠、㉔(水煙付)宝珠、㉕(内輪蔵指図・経箱姿図)、㉖(八角割法)、㉗(宮殿高欄)、㉘(擬宝珠)、㉙三ツ鼻掛魚、<以下、木鼻・臺股等絵様各種>。

中之巻:①-1(鳥居)、-2 寂光鳥居、-3 影向鳥居、-4 竜光鳥居、-5 かんしやう鳥居、-6 (常式鳥居)、②(一間社向作)、③(一間社流作)、④式間社之事、⑤三間社、⑥五間社之事、⑦拝殿之事、⑧(神廡)、⑨(鐘楼)、⑩楼門、⑪(三間四面堂)、⑫(一間社流作)、⑬(一間社向作)、⑭四ツ足門、⑮(八脚門)、⑯(平一間山門)、⑰(水門)、⑱(三間四面堂)、⑲(三間仏殿)。

上之巻の⑬に、「東都 官匠溝口若狭源林卿字子印号文山」と記され、同巻末に「右図面者延享四丁卯夏写」とあり、小普請方大工棟梁溝口若狭林卿が延享4年(1747)に筆録したものと考えられる。また溝口林卿は、技術者であると同時に相当な学究であったようで、当史料筆録後宝暦8年(1758)に、当時の大工用語等を考究した『紙上蜃気全』を著わしている<sup>11)</sup>。

さて当史料の記載内容であるが、まず上之巻は、いわ



\* ③は、①の絵様を露盤に描写しながらも、全体の比率は②に従っている。しかし、④は③より後の筆録ながら、①の割付を示している。

図-1 「宝珠」の木割、各史料比較

ゆる部分意匠図で、『(甲良宗賀伝来目録)』—「小割図」や『建仁寺派家伝書』—「匠用小割図」に類する図が多数含まれている。また当史料の図には、「匠用小割図」にあって「小割図」にない⑩⑪や⑫が含まれるが、「小割図」と「匠用小割図」で木割の異なる、例えば⑫等のように、「小割図」にある内容を伝えているものも多数みとめられる(図-1)。何れにしても、当巻の内容・構成は、ともに雑然としており、おそらくは『建仁寺派家伝書』編纂にあたっての下資料など、甲良家に所蔵される雑多な図面類を収録したものと考えられよう。

次に中之巻に収録されるものは、何れも一般的な建物毎の木割である。⑬⑭のように禅家に属する項目もあるが、全体としては、いわゆる宮雛形が大半を占める。そして木割内容も、『建仁寺派家伝書』にあるものとは別で、後述のように公刊木版本宮雛形との関連が強うかがえる内容となっている。

以上のように当史料は、内容的特色に一貫性のない混然としたものであるが、両巻末に『諸堂』などと同じ「建仁寺流官匠甲良印」なる角印があり、甲良家の史料として所蔵されていたわけである。これはまた上之巻⑧⑨に見られる具体的な建物名とも関係していると思われ、作事方大棟梁甲良家と小普請方大工棟梁溝口家の流派を同じくする親密な師弟関係を示唆するものとなっている<sup>12)</sup>。

(3) 『匠道奥秘巻』(東京大学所蔵<sup>11)</sup>)

当史料は、卷子本4巻で、何れも茶地紋入布表紙の体裁をもつ。図主体の記述で、別々に描かれた各図面の糊付部分に、甲・乙・丙・丁なる編集時に付されたと思われる符号がみとめられるので、史料順序はこれに従う。上記題名は各史料題簽にあり、さらに「宮之巻」「堂之巻」「楼之巻」「塔之巻」と付記される。史料の法量は順に、「宮之巻」:(27.2 cm×733.5 cm), 「堂之巻」:(27.3 cm

×664.5 cm), 「楼之巻」:(27.4 cm×536.2 cm), 「塔之巻」:(27.2 cm×808.2 cm) で、記載内容は次の通りである。

1 「宮之巻」: ①ハイデン<sup>(拜殿)</sup>, ②一間社向作, ③壹間<sup>(社)</sup>やしろなかれ作妻<sup>(流)</sup>, ④内陳下陳造作<sup>(外)</sup>, ⑤壹間なかれ作平<sup>(社次カ)</sup>, ⑥二間社妻, ⑦二間社平, ⑧式間社, ⑨三間社(妻三間), ⑩三間社(妻二間), ⑪王子作, ⑫三間社(妻三間), ⑬大社作, ⑭五間社(妻), ⑮五間社平, ⑯(見世棚作), ⑰妻入拜殿。

題名通り神社建築の木割で、当巻の中でも、⑥と⑧、⑨と⑫がそれぞれほぼ重複する図となっている等、未整理の部分がある。もとより筆写本であるが、木割内容そのものは類型的で、①~③⑤~⑩⑫⑬⑮は、程度の差こそあれ木版本宮雛形に類似する内容である。また⑰は、甲良棟利の記した『堂社門』の④と同様の図であるが、木割値などの記入は全くない。

2 「堂之巻」: ①法球塔<sup>(マ)</sup>, ②九輪塔, ③唵祇塔, ④須弥塔, ⑤惣輪塔, ⑥惣輪塔日光有之, ⑦阿含塔, ⑧鑄龜塔, ⑨五輪塔<sup>(華嚴塔)</sup>, ⑩ケコントウ, ⑪輪塔<sup>(金剛塔)</sup>, ⑫コンカウトウ。

題簽名とは異なり、当巻の木割はいわゆる宝塔類に属するもので、次巻「楼之巻」との誤装訂と考えられよう。記載される項目名のうち、④~⑧⑩~⑫は『建仁寺派家伝書』—「宝塔類」に見られ、建築形式が近似する部分も多数見られるが、柱間枝数などにおける相違点も多く、全く同じ木割内容とはいえない。しかしながら、当史料の図の多くは、立面図とともに断面図が描写されており、説文記述のみの「宝塔類」ではうかがえなかった形態や内部構造を検証する上で貴重な史料である。

3 「楼之巻」: ①鐘楼・鼓楼, ②平壹門山門, ③内輪蔵, ④天台真言金堂, ⑤三間仏殿(すきり立), ⑥一間山門, ⑦天台真言金堂, ⑧三間仏殿, ⑨五間山門(妻三間), ⑩僧堂, ⑪金堂, ⑫僧堂, ⑬唐棟門, ⑭雨打無仏殿。



料として所蔵された背景を探る必要がある。当史料が記された延享4年の状況を見ると、甲良家自体の技術レベルにかかわるものと思われる。すなわち、時の甲良家の大棟梁は6代棟保で、享保20年(1735)に5代棟利が没した後、家督を継ぐ。そして翌年作事方大棟梁となるが、同22年病床に伏し、それが、宝暦7年(1757)退隠するまで続くのである<sup>17)</sup>。従って、さしたる事績もみとめられない。すなわち、この甲良家が名ばかりであった頃、誰か実力のある者が甲良家を補佐する必要があったと察せられるのである。そうした時、力量のある溝口家に、甲良家の分担をある程度任せても不自然ではないであろう。当史料は、こういった任命後、さしあたっての必要に迫られて記されたものと推定される。

### (2) 江戸建仁寺流系本の衰退

次いで、木版本宮雛形は、上述の書誌でいくつか指摘したように、『匠道奥秘巻』や『諸堂甲良棟全編』に影響を及ぼしていく。また『諸堂甲良棟全編』には、⑩⑪など武家雛形の収録も指摘される。奥書には、「官匠御作事方大棟梁、建仁寺流、甲良棟全」と、紙面一杯の大きな楷書体で署名されてはいても、収録内容自体にそのオリジナリティは全くうかがえない。しかも、元々は作事方の下に置かれるべき<sup>18)</sup>、小普請方棟梁児玉家よりの伝来を堂々と表示しているのである。もはや、全盛を誇った江戸初・中期の甲良家の面影は当史料においては見出せない。棟全自身の事績を見ても、その殆どが修復にかかわる工事であり、新規造営は、天保9年(1838)の江戸城西ノ丸殿舎造営から慶応3年(1867)の昭徳院霊廟造営まで、わずか8件程度にとどまっているのである<sup>17)</sup>。

以上のように、甲良宗広以来の技術は、これら「雑録本」の内容を見る限りにおいて、次第に衰退していったことが明らかである。しかしながら、まさに「雑録」の様態をもちながらも、木割内容自体に多くの特色を有す史料が存在する。『大工割方雑集』がそれである。そこで改めて、当史料の江戸建仁寺流系本における位置付けを明確にしたい。

### (3) 『大工割方雑集』の史的意義

甲良家が『坂上勘兵衛伝来武家目録』を保有したのは周知であろう<sup>19)</sup>。しかしながら、その内容については、大熊喜邦博士が大正7年に紹介されたものを<sup>20)</sup>、わずかに知るのみで、全体像については不明とされてきた。ところで、当史料には、書誌で見たように、巻頭及び巻末に「坂上勘兵衛」の名がみとめられる。そこで、大熊博士の紹介された「昔御所様屋敷主殿」の図に照らしてみると、当史料③の図とまさに同じ内容の史料なのである。しかしながら、詳細に比較すると、文字の位置などに、わずかではあるが相違があって、決して同一史料ではない。とはいえ、個々の筆体等はかなり精密に写筆された

ようで、例え当史料のほうが写体としても、原本の様相は忠実に伝えていると考えられる。従って、当史料の内容を『坂上勘兵衛伝来武家目録』と同様と仮定して考察すると、次のようなことが言える。

①坂上勘兵衛は、桃山時代から江戸初期にかけての棟梁で<sup>20)</sup>、加賀藩に建仁寺流を伝えた坂上嘉継と同族とされる<sup>19)</sup>。

②和泉嘉右衛門は、江戸幕府の彫物師として有名な和泉家第11代加右衛門義乗と考えられ、寛文9年(1669)に没している<sup>21)</sup>。

③甲良又兵衛から児玉次郎吉へ伝来した記述があるが、両人物とも特定できないものの、『諸堂甲良棟全編』に多くの「児玉家伝来」の木割があり、そのうちの4項目は当史料と酷似している。

④幕府小普請方棟梁児玉重矩が、明和3年(1766)に写した『番匠秘事袖鑑』の原本が、享保初(1720)頃児玉吉重の記したものであるとしてその存在が推定され、その内容の一部に関連する当史料が、さらに先行して存在すると考えられている<sup>22)</sup>。

⑤当史料中に「天和元年」の年代記述がある。

⑥当史料中に収録される木割のうち10項目程度は、『建仁寺派家伝書』の木割と近似するものであるが、全くは一致していない。

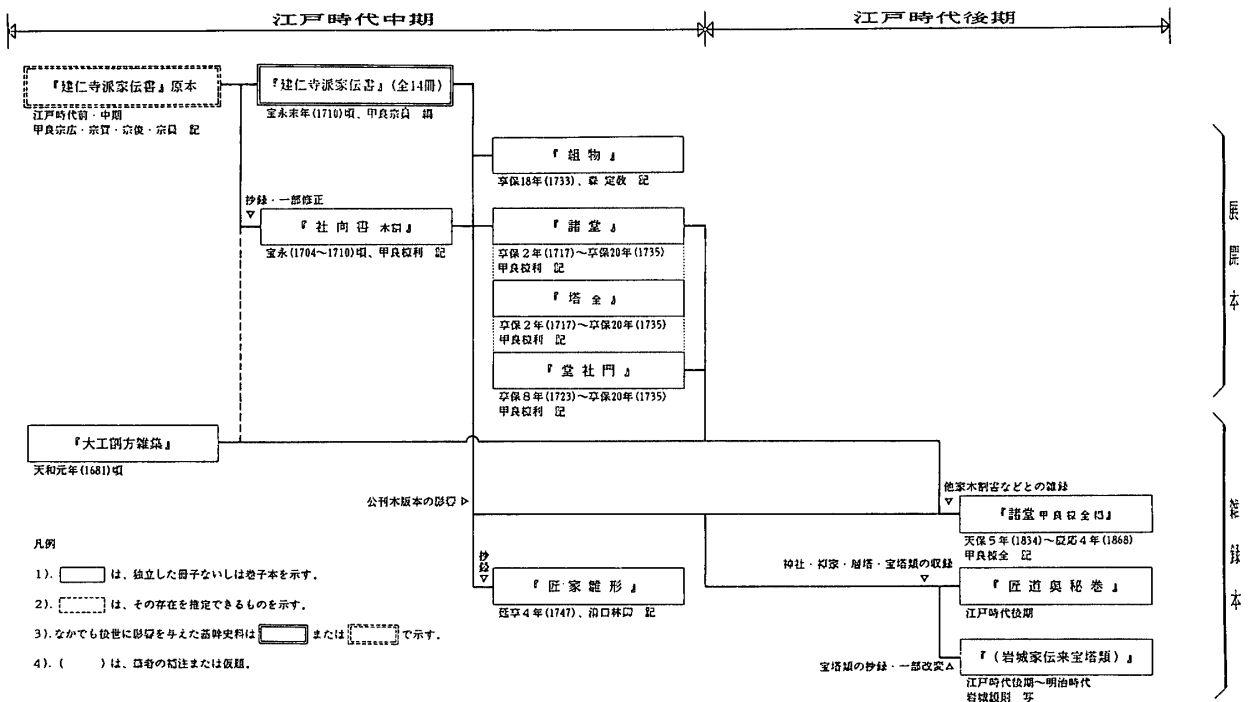
以上のことを考え合わせると、当史料は、天和元年(1681)頃、坂上勘兵衛や甲良家の史料を合わせ児玉家の何れかが収録したもので、それが江戸時代後期、再び甲良家に伝わることになったものと推定される。もとより流派内での技術交流で、木割内容に大差はなく、宝永末年(1710)頃に編まれた『建仁寺派家伝書』にしても、当史料の内容については参考程度にしか利用していないものと考えられる。

### 結

以上のように、江戸建仁寺流系本の「展開本」と「雑録本」に属する諸史料について、その内容を分析し特質を論じてきた。

まず、宝永頃、甲良宗員によって『建仁寺派家伝書』が再編されていた時期に、その実子棟利は、大棟梁見習として研鑽を積み、甲良家諸史料をもとに『社向書木割』を筆録する。さらに棟利は、甲良家5代の名に相応するべく、『諸堂』などを積極的に著わしていく。一方、この頃小普請方が作事方を凌駕していたこととも関係しようが、甲良家内部でも実力のある門弟が甲良家の名代を勤めることもあって、彼等により甲良家の技術を工夫発展するべく諸史料の整理が行われていく(以上「展開本」)。

ところが棟利没後は、甲良家自体が沈滞化していき、かろうじて幕末まで大棟梁職を継承できたともいえる状況であったが、それも小普請方棟梁溝口家や児玉家の協力あって初めて可能なのであった。しかしながら、甲良



図一2 江戸建仁寺流系本の展開に関する編年模式

家技術を発展させるようなことは、作事そのものの減少とも相俟ってとうてい望むべくもなく、「基幹本」の本質を失った、極めて典型的な収録にとどまるものが大半であった（「雑録本」）。とはいえ、作事方全盛期の様相を伝える雑録集も一方で存在し、これは多様な形で伝承されていったのである。

以上、これらのことを図一2のごとく模式化して結論とする。

注

- 1) 河田克博・渡辺勝彦・内藤昌「江戸建仁寺流系本の成立」(『日本建築学会計画系論文報告集』第383号、昭和63年1月)。上記論文において、特に『建仁寺派家伝書』の成立過程を分析し、貞享元年(1684)および同2年の甲良宗賀の奥書をもつ『(甲良宗賀伝来目録)』の記載内容が、寛永13年(1636)に遡る内容を含み、結果として『建仁寺派家伝書』の原本の様相を伝存していることを明らかにしている。
- 2) 当史料は、内藤昌「大工技術書について」(『建築史研究』第30号昭和36年10月所収)において、一応の紹介をした。
- 3) 甲良家にて小左衛門なる幼名を持つ者は、初代宗広・5代棟利・7代棟政の3名である。そのうち5代棟利は宗諱の幼名もあり、正徳3年(1713)には父宗員(棟利)に従い日光東照宮修復にあたり、同格を以て本宮三重塔造営の棟梁をも勤めているが、その功により同年9月滝尾神社本殿上棟の日、志摩を受領名とする。さらに享保2年には、宗の字は諱の文字故に憚あるとて棟利と改めており、法名は「信喜院大悟宗利大夫」である(内藤昌「大工技術書について」:前注の他、田辺泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就いて」:『建築雑誌』第609号昭和11年2月所収、『従

- 先祖御用相勤来候覚』、『甲良家系図』等参照)。
- 4) 棟利自身の記した『従先祖御用相勤来候覚』によれば、「文昭院様御代宝永七寅年芝口御門新規御取ノ立被遊御作事御用父左工門に被仰付候節相添罷出見習御用相勤申候」とあるが、甲良家10代棟全の記した『由緒書』には、「先祖 甲良若狭ノ常憲院様御代宝永元酉年上野長昌院様御霊ノ屋御造営の節より見習御用相勤(後略)」とある。
- 5) 内藤昌「『匠明』祖本:『諸集』について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』昭和50年所収)。
- 6) 田辺泰「江戸幕府大棟梁甲良家に就いて」(前掲注3))。
- 7) 甲良家史料の多くは、昭和3年大熊喜邦博士の斡旋により、甲良家17代伝次郎氏が、日比谷図書館(現都立中央図書館)に寄贈されたものである。
- 8) 『組物』奥書  
「右組物(右)地品具多少分数造之様区也、因茲ノ建仁之定流速為可察之、今爰頭函書式ノ大旨驗為甲良家秘蔵者也、享保十八(1704)癸丑二月下旬 森万右衛門定教ノ之」  
宝永4年(1707)7月12日に再建なった長野善光寺如来堂は、甲良豊前宗賀(時に80才)の下で行なわれたが、実際の棟梁は「惣元締」として門弟「木村万兵衛玄喜」に統括させ、「副匠」として同じく門弟「森万七郎」(森万七郎トモ)「森嵯峨右衛門定教」らを置いている(『善光寺如来堂再建記』:長野県立図書館所蔵、『甲良家史料』)。このことは、万右衛門定教が嵯峨右衛門定教の後の名と考えるに差し支えなく、如来堂再建時の記録からすれば、当『組物』は定教54才の時の筆録となる。一方で森一族は、元々勢州一身田(現・津市一身田)の出身で、寛文6年(1666)再建の専修寺御影堂造営時の権大工として「森万右衛門」の名が見える(『高田史料』)。他にもいくつかの森氏の事績が一身田に確認されるが、要するに、一身田を本拠地としていた森一族は、その力量を買われて、信州から江戸へと進出していき、幕府大棟梁甲良家の門下として大いに活躍していったわけである(野尻孝明「一身田の工

- 匠森氏について」：『高田学報』第74輯昭和60年12月高田学会刊所収参照）。
- 9) 当史料巻頭には、「巻之六」と記され、何者かが収集した史料のうちの1であることが判るが、記載内容は全く独立したもので他との関連はない。
  - 10) 加賀建仁寺流系本との関連については、江戸建仁寺流系本とほぼ同様の木割、例えば㊸高欄之割などで相関する部分もあるが、総じて見ると直接の関連は認められない。
  - 11) 『紙上蜃気』(内閣文庫所蔵)の奥書には、「右紙上蜃気宝曆八戊寅歳撰／寛政二庚戌歳増補為蔵板／武州江戸／彫工 岩崎伝右衛門」とあり、本文冒頭部分に「紙上蜃気／東都大匠 溝口内匠源林卿 撰」と記される。また本文では、「…カンセウ鳥居 文字／未詳ヲカ…」なる記述があり、『匠家雛形』中之巻①-5が「かんしやう鳥居」とあるように、他の「影向鳥居」や「竜光鳥居」などの項目名と異なり、漢字で記されていないことと関係しよう。
  - 12) 上之巻⑧には、「武州増上寺勅額御門」とあるが、これは台徳院靈廟勅額門(現在埼玉県所沢市に移建)のことと考えられ、同靈廟(昭和20年焼失)は、甲良宗広・宗次により寛永9年(1632)造営なっている。次に⑨には、「武州紅葉山有り」とあるが、紅葉山東照宮縁廻修復を寛文10年(1670)に甲良宗賀が行ない、その時の破損方奉行として溝口作左エ門の名が見られるのが注目される。小普請方大工棟梁としては、延宝9年(1681)の寛永寺蔵有院靈廟作事の際、大棟梁甲良宗賀とともに、小普請常棟梁として溝口九兵衛が活躍するのを初見として(『甲良家史料』)、以後の幕府関係の造営や修復に溝口家が数多く関与している。当史料を記した溝口林卿については、宝暦8年の寛永寺本坊修理に若狭の名が見え(『宝暦録』)、その活躍期をうかがうことができる。
  - 13) 東京大学への寄贈者は井上繁次郎氏で、明治18年5月18日付の「帝国大学図書館」印が押される。また2「堂之巻」表紙裏に、「匠立社副長 吉川繁太郎持」とあり、この名は他の3巻にも同様に記されているところから、江戸期には、おそらく棟梁格の工匠間を伝来してきた史料と考えられる。
  - 14) 文政12年(1829)17才で大棟梁見習となり、天保5年(1834)父棟彊の家職を継ぎ大棟梁となる。天保8年には若狭を、文久元年(1861)頃には筑前を名乗り、明治11年66才で没す(『甲良家史料』他)。
  - 15) 松本喜平治については明確でないが、児玉家は幕府小普請方棟梁を輩出した匠家である。また甲良富次郎は、正名を棟成といい、棟全の伯父にあたる(『甲良家系図』)。
  - 16) 岡本真理子『日本建築古典叢書5近世建築書一座敷雛形』大龍堂書店昭和60年刊参照)。
  - 17) 『甲良家史料』
  - 18) 鈴木解雄「江戸幕府小普請方について」(『日本建築学会論文報告集第60号昭和33年10月所収)。内藤昌・中村利則「江戸小普請方の成立過程について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』昭和44年所収)。
  - 19) 中村昌生・中村利則「建仁寺流大工坂上家について」(『日本建築学会近畿支部研究報告集』昭和48年所収)、内藤昌「安土城の研究(上)」(『国華』第987号昭和51年朝日新聞社刊)。
  - 20) 大熊喜邦「所謂鎌倉御所及鎌倉御所図私見」(『建築雑誌』No.375~377大正7年所収)。
  - 21) 伊東龍一「江戸幕府作事方彫物棟梁和泉家について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』昭和60年所収)。
  - 22) 麓 和善・岡本真理子・渡辺勝彦・内藤 昌「木割書系絵様雛形の系譜」(『建築史学』第10号昭和63年3月所収)。

## SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 389.1

### EVOLUTION OF THE ARCHITECTURAL REFERENCE BOOKS OF EDO-KENINJI SCHOOL

by KATSUHIRO KAWATA, Prof. of Shuusei Technical College, KAZUYOSHI FUMOTO, Japanese Association for Conservation of Architectural Monuments, Dr. KATSUHIKO WATANABE, Assoc. Prof. of Nagoya Institute of Technology, and Dr. AKIRA NAITO, Prof. of Nagoya Institute of Technology, Members of A. I. J.

We can find out the ten architectural reference books which described the technics of the Edo-Keninji school "Kora-ke". In this paper, we intend to clarify the bibliography of each book and to analyze the contents of that. As a result, we are able to draw out the following conclusion ; in the evolutionary process, we can look substantial evolution up to the mid of eighteenth century, however then, we can find out no creation and conventional books, and the ten books are divided by the above two stage. Fives belong to the evolutionary stage. Another fives are to promiscuous stage.